

四季録

数回にわたり、宇和島市三間町の旧毛利家庄屋住宅で展開した作品発表のエピソードをお話ししました。作品を展示すればそれだけで展覧会が成立するのではなく、場所と作品に加えて多くの方々が見えざる所で関わりを持ってくださって初めて成り立つことでした。準備から搬入・搬出に至るまで、また観に来てくださる方々も含め、他者との出会いや交流がたぐささんあることが浮かび上がってきました。

このように個展「古民家と彫刻」は、私に「他者との交流」がいかに大事かを再び認識させる展覧会となりました。そして私は表現活動の結果として作品が生み出される背景や、表現が受け入れられていく過程にも意義を感じ、最終的な「作品」だけがすべてではないという認識をさらに強くしています。

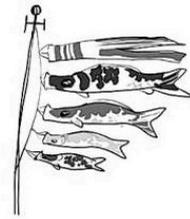
さて、こうした学びを得まして、私は2025年11月、再び毛利家を舞台に作品を発表させていただく運びとなりました。今回は松山東雲女子大学の子ども専攻3年増本ゼミに所属する学生5人による作品と、私の作品によるグループ展覧会という発表を考えています。私のゼミで学ぶ学生たちは将来子ども

学生たちとの協働(1)

たちと生活を共にし、喜びや悲しみもすべて丸ごと共感して寄り添うことのできる保育者となっていくべき人材です。私は「造形活動ゼミ」としてこのゼミを開講していますが、ここでは3年から4年までの2年間で造形表現活動について学びや経験を深め、4年次は卒業研究として作品「卒業制作」と、作品制作

に関係する「卒業論文」に取り組むことになっていきます。

作品制作と文章執筆の両方を課しているのは、自由な造形表現活動による教育効果に期待すると同時に、作者は自作のコンセプトや、その作品制作が教育の現場で持つ意味や期待される



経験です。そして論文では先行研究(事実)と自分の考え(意見)とを区別して述べることを学びます。自身の制作活動で得た知見(試行錯誤した点や、素材体験から感じ取ったことなど)を含めて分かりやすく文章化することが必要です。

この春こうした学びを始めたばかりの3年ゼミ学生らに対して、私は「毛利家」という優れた教材を提示することにしました。若者らが時間と記憶の集積した毛利家に身を置いた時に何を感じ取るのか、そして、そのことをどのような作品として表現していくのかを問いたいと思います。行く先の見えない大海にこぎ出した私たちの豊かな時間は、まだ始まったばかりです。(増本 達彦・松山東雲女子大学教授・彫刻家(Drillium asumoto))

効果について、専門外の方々にも分かりやすく説明する力が必要だと考えるからです。作品には、テーマ・素材ともに多様性を期待します。学生時代に「こんなものを作りたい、描きたい」という思いを持ち、伸び伸びと制作することは、非常に大切な